

日本人学生の「日本語」の学びと日本語再発見 —グローバルマインド形成への1つのアプローチとして—

副島 健治

“Japanese Language” rediscovery and learning by Japanese students : As an approach toward the global mindset formation

SOEJIMA Kenji

要 旨

近年の日本人学生は「内向き志向」とされる。本報は、日本人学生が改めて自文化である日本語・日本文化を学ぶことを、グローバルマインドを身につける1つのアプローチとして位置づけ、その学びにより自らのアイデンティティを確認し誇りを持って外へ目を向けるようになる契機となるのではないかという「グローバル人材育成」の試みとして実践した報告である。関わった学生たちは、日ごろ気に留めていなかった「日本語」をあらためて学び、「発見」することを経験した。その新鮮な経験によって、教養としての知識を身につけるということだけにとどまらず、気おくれすることなく外国（語）へ目を向けることのできる日本人としての自負も生まれ、留学することを考え始める学生もでた。「グローバル人材育成」という観点から、自己の文化を見つめ直すことが重要であることが明らかとなった。

【キーワード】 グローバル人材、心構え（マインド）、「日本語」の学びと再発見、アイデンティティ、留学

1 はじめに 一 本報の背景と目的一

近年、あらゆる場面で「グローバル」という概念が取り上げられることがたいへんに多い。ここ20～30年間の交通・通信手段の驚くべき急速な発達により、地球規模でのヒト・モノの移動、情報の発信と獲得の容易さはこれまでの歴史上類を見ない。このことは、ビジネスはもちろん学問的、文化的、人道的な心の交流など隔々に渡って言えることである。これは「国際」という言葉に象徴されるような「国」・「国境」などの既成の枠をかき消してしまうほどの勢いさえある。

しかしながら、時代に逆行するかのように、日本という枠を越えて海外への留学を希望する日本人学生の数は減少し、また学生のみならず、会社に就職した若者が海外勤務を望まないという傾向があるというのも事実である。この傾向は、内向き志向となった日本人が多くなったという現実であり、そのような背景において、「グローバル人材育成」が謳われ、近年の大学教育のファクターとして取り上げられるのはあまりにも当然であるとさえ言える。

「グローバル人材」というのは多様な人材の積極的な活用を行なおうとするダイバーシティを重視する企業の姿勢とリンクする重要な概念・視点である。英語などの外国語を身につけることは確かに重要である。後掲の「要素Ⅰ」にも示されている通りである。しかし、英語が出来るからといって、すなわちグローバル人材であるとは到底言えない。なぜなら、それは有効なコミュニケーションの道具を持っているというだけであって、この道具をどのように使いこなすかということが問われるからである。したがって、英語力そのものと相俟って、学生の心に、国境を跨いだ多様な価値観を受け入れることの出来る、一人の人間として気おくれせず堂々とした心構え（マインド）を持ち合わせるものがさらに重要である。それは、自らの文化的な立ち位置が定まっていなければ到底持ち得ない心の有り様である。

さて、「グローバル人材」とはどのような人材であろうか。教育、ビジネスあるいは国際ボランティア等々、その立場や切り口によって、さまざまな定義ができよう。「グローバル人材育成推進会議中間

まとめ」(2011年6月:グローバル人材育成推進会議)には「「グローバル人材」とは」が明快に述べられている。それによると、「グローバル人材」の概念は以下の3つの要素に整理される。(p.7)

要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力

要素Ⅱ：主体性・積極性，チャレンジ精神，協調性・柔軟性，責任感・使命感

要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

筆者は、日本人が足を止めて日ごろ気にも留めていない無意識に向き合っている日常の日本(語)文化を学び直し改めて認識することは、日本人としてのアイデンティティーの再確認というグローバル人材育成の見えにくい最も重要な土台形成に寄与すると確信している。その「グローバル人材」の育成の1つの試みとして上掲の要素Ⅲに挙げられている「日本人としてのアイデンティティー」について日本人学生に自覚を促し、自らの足元をしっかりと見据え、それを足がかりに日本人としての誇りと自負を持って日本の外にも目を向け、内向き志向から脱却することを期待して実践した、富山大学における活動(授業)の実践を本報で報告するものである。本報の表題には「日本人学生の」としているが、実際には初等中等の教育現場の現職教員を対象とする「教員免許状更新講習」の事例も取り上げた。

日本語という言語を前提としたアカデミックスキルの習得などを考えるとき、日本語を学ぶことは確かにもはや留学生などの非母語話者だけのものであるとは言えず、むしろ、日本人学生にこそたいへん重要な学習事項である。しかし、本報は、近年の日本人学生の日本語力、思考力の低下に抗する意味での初年次教育等における「日本人学生に対する日本語教育」を論じる論考(三宅ほか2004, 高松2006, 境2012など)とは距離を置くものである。

2 日本人(学生)の「日本語」の学びについて —その意義—

普段、無意識にできることであっても、それを意識化し客観化して説明することは容易くはない。経験として学んだことのある外国語と同じように、母国語の日本語を世界の中の1つの「外国語」として明確に意識化し改めて学ぶことは、日本語の言語文化の再認識・自覚を促し、日本人としてのアイデンティティーを確かなものとするのにたいへん有効であると言えるのではないか、ということに筆者は意義を認め、強く意識して下の3つの実践を行なった。

(1) 教養教育科目(コロキウム科目)「留学のための教養講座」の実践

(2) 人間発達科学部専門教育科目「国際交流活動論」の実践

(3) 平成29年度富山大学教員免許状更新講習の【選択科目】「教養としての日本語教育」の実践

(3)は現職教員の教員免許状更新のための講習であるので、日本人としてのアイデンティティーの自覚を促がすということを前面に出した内容ではなかったが、結果として、外国語としての「日本語」を振り返ることによる日本人としてのアイデンティティーの確認のようなことが含まれているので、合わせて取り上げたい。まず、それぞれの実践を概観し、受講者のコメントや感想・所見などから読めるところを整理する。

本報の取り組みは、(3)の教員免許状更新講習の実践を除いて、「留学」「異文化コミュニケーション」「外国語(英語)」などをキーワードとする講義を行なった同僚の教員とのチームティーチングのような形で協働してなされた。この協働によってさらに大きい相乗的な効果が得られたのではないかと思われる。

2.1 教養教育科目(コロキウム科目)「留学のための教養講座」の実践

日本人学生の海外留学(送り出し)を支援することは、全国の大学がおよそそうであるのと違わず筆者が奉職する富山大学においても重要な学是の1つである。2013年10月に国際交流センター¹⁾が発足して以来、そのセンターの主な業務の1つに挙げられている。筆者と同僚(上述)は、その業務遂行のために何が出来るかを議論し、辿り着いた1つの答えとしての試みが、教養教育科目としてのコロキア

ム科目「留学のための教養講座」を開講することであった。2016年度の前期から開講している。²⁾

この科目は、受講しても単位が出ないが、その意味において受講する学生は本気で「留学のための教養講座」を受けに教室に来ていたと言え、多少ともすでに留学することに興味を持っている学生たちであることが認められる。

教養教育のコロキアム科目「留学のための教養講座」は、海外の大学への留学を目指す日本人学生に、日本語を見つめ直すことによってあらためて自文化を再認識することを促すものであり、換言すれば、「「自分」を知るところを起点とし、自国の文化・言語を revisit (再訪問) して、そこから更には「相手」すなわち異文化・多文化を受け入れられる素養を身に付ける。また、外国語に関する素養も身につける。」(シラバスより抜粋) というのが科目の趣旨である。

毎週水曜日の3限目に共通教育棟 E12教室で実施した。教養科目に位置づけられていることから受講生は1・2年生がほとんどであったが、3・4年生の学生も受講した。

2016年度 前期 受講者：16名 (受講者の内訳：人発(3)、経済(1)、人文(9)、理(1)、工(2))

2016年度 後期 受講者：8名 (受講者の内訳：経済(2)、人文(1)、理(5))

2017年度 前期 受講者：7名 (受講者の内訳：人発(2)、経済(1)、人文(3)、工(1))

※ 受講者数は、実際に授業参加した学生の数(単に登録しただけの学生を除く)である。

15回の授業のうち、筆者が主に自文化としての「日本語」を見つめ直す活動をし、同僚(前出)が「留学」「異文化理解・異文化コミュニケーション」などをキーワードとして講じた。下に筆者担当の前者の概要について述べる。

自文化すなわち日本文化の表象としての「日本語」を見つめ直す実際の活動とは、次のような活動であった。

日本語を見つめ直す参考図書として、新潮社の『日本語 表と裏』(森本哲郎)(全部で24の章から成る)を取り上げ、学生は任意の章を担当し、各章をそれぞれの学生が読み込み、その上で他の受講者に解説し自分が感じたことをコメントして他の受講生と意見交換する、というやり方で授業を進めていった。教員(筆者)はファシリテータとして振る舞い、必要に応じて適宜担当学生の説明を補完した。³⁾

例えば、日本語は曖昧であるという批判を耳にする。しかし、上掲の参考図書の第一章には、16世紀に来日したポルトガル人宣教師のルイス・フロイスの「ヨーロッパでは言葉の明瞭であることを求め、曖昧な言葉を避ける。日本では曖昧な言葉が一番優れた言葉で、最も重んぜられている。(フロイス『日欧文化比較』岡田章雄訳)」という指摘が引用されており、これは日本語の曖昧さは決して言語として劣るという面ではなく、日本語の文化的な表象であることを示唆している。例えばこのような学びは、理解した学生にとっては目から鱗^{うるこ}であった。

受講した学生たちの所見は、本授業の成果の判断の材料となるが、受講後の学生のコメント等については、後述する。

2.2 人間発達科学部専門教育科目(選択必修講義科目)「国際交流活動論」の実践

本科目は、人間発達科学部の教授がコーディネートしている科目であるが、ガイダンスを除き、筆者と国際交流センターの同僚(前出)の2人が講じた。この「国際交流活動論」の科目は、将来初等中等教育の教職に就くことを目指す人間発達科学部の学生を対象とするもので、「自分が日本語の母語話者であることを認識し、日本語という言語を客観的にとらえる努力をすることを学び、その上で日本文化の表象としての言語である日本語の特徴について基本的な知識と教養を身につけ、「外国語としての日本語」および「日本語教育」に関する理解を深める。」(シラバスより抜粋)ものである。教材としては、問題集の形で整理されている『日本語教師の実践力』(全国日本語教師養成協議会編・著、2006)の他に新聞記事等を使用した。

この授業において筆者が担当した部分は、現在の学校教育の現場には日本語を母語としない子どもが

在籍しており、このような現実において将来教員を志望する学生にとっての「日本語」や「日本語教育」の学びはきわめて重要であったと思われる。なぜなら、今日の学校教育の現場には出自が日本と異なる子どもたちが在籍することは珍しくなく、教員が「グローバル人材」であることがもはや当然の社会的要請であると言えるからである。

受講対象は人間発達科学部の2年生～4年生で、単位は2単位である。本授業は人間発達科学部の専門教育科目であることから、下のように受講生は全員が人間発達科学部の学生であった。

2016年度 後期 受講者：7名（受講者の内訳：3年生(6)、4年生(1)）

実施教室：国際交流センター2階 講義室2

2017年度 前期 受講者：20名（受講者の内訳：2年生(14)、3年生(5)、4年生(1)）

実施教室：人間発達科学部342講義室

筆者が「日本語」「日本語教育」について講じ、同僚は「留学」などをキーワードとしながら異文化コミュニケーション論を講じたが、ここには筆者の講じた前者の部分について述べる。

現実として近年の学校教育の現場には、外国人の子弟が在籍することはさほど珍しいことではなくなっており、教科の指導とは別に、日本語や日本語教育そのものについての知識や素養が教員に問われることが想定される。そのような意味において、将来教壇に立とうとする学生が、今一度（外国語としての）「日本語」を改めて捉えなおして認識し⁴⁾、さらには日本語教育についての素養も身につけるということを目的として実践した。副産物として、結果的に日本語を捉えなおすことによって、世界の中の言語としての日本語の特徴に気づき、あるいは自らがその話者の日本人であることを再認識させることになった。

受講した学生たちの所見は、本授業の成果の判断の材料となるが、受講後の学生のコメント等については、後述する。

2.3 富山大学教員免許状更新講習⁵⁾【選択必修】「教養としての日本語教育」の実践

筆者は下記のように、2017年度の富山大学で行なわれた教員免許状更新講習の講師として講習名「B017 教養としての日本語教育」を講じた。

日時：2017年8月2日(水) 9:00～16:40, 90分授業を午前に2コマ、午後に2コマ実施

会場：富山大学五福キャンパス共通教育棟 E23教室

受講者：30名

本講習は、すでに実際の教育現場に立っている初等中等教育に携わる現職の教員が受講対象者である。受講者は30名で、言うまでもなく大学生とは比較にならないほど、学びのモチベーションは高く真剣で熱心な受講者であった。受講者の勤務する学校で担当する教科は多岐にわたり、学校種別の内訳としては、高校の教員(6)、中学校の教員(7)、小学校の教員(6)、幼稚園・保育所(園)・こども園(11)であった。(一時的に現場を離れている教員を含む。)

「本講習では日本語を外国語して捉えなおし、その視点から日本語の音声(発音)、文法・表現、アスペクトなどを見つめて、非母語話者にとっての外国語としての日本語がどのように映っているかを考える。」(シラバスより抜粋)という趣旨であった。教材としては、前述の「国際交流活動論」と同じく、全国日本語教師養成協議会『日本語教師の実践力』を使用した。

講義内容としては、前述の「国際交流活動論」の授業と重なるところが多いが、(1)受講者は現職の教員であり、勤務校に実際に外国人の子どもが在籍していたりすることもあって意識が高く、(2)受講者全員に、学習活動に効果的に従事することを可能ならしめる学習者としての心身の準備状態(学習のレディネス)が完全に整っていた。そして、(3)受講生の中には外国語(英語)の教員や国語の教員も含まれており、また、(4)日本語教師として中国に派遣された経験を有する高校教員もいた。そのようなことから、「(外国語としての)日本語」の学習に対する高度な反応が見られ、最良の集団学習の体制

であった。

講習に参加した教員たちの所見や感想は、本講習会の成果の1つの判断の材料となるが、受講後の教員たちのコメント等については後述する。

3 まとめ

本報に3つの実践を挙げた。それらのいずれの受講者の所見からも、日本人としての自文化の表象である「日本語」への気づきに関するコメントが多く見られた。そして、その気付きは、留学への呼び水となり得ることも確認できた。本報の巻末に受講者の所見・所感を挙げた。⁶⁾ 受講生が筆者に口頭でコメントを語る場面も少なくなかったが、それらは書かれたものを強化するものが多かった。

筆者は約30年に渡って外国人に対する（外国語としての）日本語教育に携わってきたが、本報で報告するような、母語話者に「日本語」を教授するという場面は、日本語教師養成や日本語教師研修会の講師という場面以外にはほとんどなかった。日本人は学校教育で「国語」を学ぶことはあっても、一般には「日本語」を学ぶことはまずない。そこで、この学び（＝1つの外国語という視点から日本語を学ぶということ）を通して、英語などの外国語と並列にとらえるところの1つの外国語として「日本語」を再認識し、そして自文化を再発見し、日本人であることをあらためて自覚するというところに、大きな意味があるということが分かった。それは、その学びによって自らのアイデンティティーを再構築するという作業であった。見方を変えれば、その学びは、「グローバル人材」が育成されることに良い影響を与え、同時に日本人としてのアイデンティティーの確認と再構築がなされ、そして結果として、「留学」だけに限らず、茫漠としていた学生の視線を外へ向けさせることに繋がることも分かった。

これらの実践を通じて、学生たちの確たるグローバルマインドの形成にも寄与することができたのではないか、世界の中の日本を感じ、日本人としてのアイデンティティーを抛り所として多少なりとも誇りと勇気を得たのではないか、それが例えば留学への契機となり得るのではないか、ということを筆者らは現場で感得した。

今後もこの取り組みをもってさらに追究していきたい。

謝辞

富山大学国際交流センターの業務における「学生の海外留学の支援」をどのような形で行なっていくか、議論を重ねる中で貴重な意見と多くの示唆を与えていただいた同僚のバハウ・サイモン・ピーター教授に感謝いたします。

注

- 1) 富山大学では2013年10月、日本語教育をはじめとする外国人留学生の受け入れに関する業務を中心にしていたそれまでの「留学生センター」を発展的に解消し、加えて新たに富山大学の学生の送り出し支援の業務も担う「国際交流センター」が発足した。（富山大学国際交流センター規則 第3条（2））
- 2) その前年度の2015年の夏、日本人学生の留学に関する1つの啓発の活動として、諸氏の協力のもと、下掲の国際交流センター主催の2回のセミナーが行なわれたが、これは「留学のための教養講座」の試金石となった。（副島、バハウ2016）
 - ① 第一回 夏季セミナー“留学を目指す学生のための「日本語・日本事情」講座”
実施期間：3日間（2015年8月3日（月）～8月5日（水））
場所：共通教育棟A43教室
 - ② 第二回 夏季セミナー“留学を目指す学生のための「留学準備の英語」講座”
実施期間：3日間（2015年8月19日（水）～8月21日（金））
場所：共通教育棟A43教室
- 3) 2016年前期においては、参考図書は学生に紹介して読書を勧めるだけにとどめ、授業で講読はせず、筆者が講義した。
- 4) 教材としては、全国日本語教師養成協議会『日本語教師の実践力』を使用した。これは問題集の形を取っ

ている。例えば、本教材の一番初めの「問題1」は以下である。

（「一な」の下線部分に着目して、4つの中で他と最も性質の異なるものを選ばせる問題）
a) いろいろな道具, b) 静かな部屋, c) 小さな車, d) おかしな味

これは、形容動詞（日本語教育では「ナ形容詞」）と連体詞を区別させる問題であるが、このような日本語についての問いに受講生が戸惑うことは、自らを日本人であることの自覚に揺さぶりをかけ、インパクトの大きい刺激になったと思われる。

- 5) 平成19年6月に改正教育職員免許法が成立し、平成21年4月1日から教員免許更新制が導入された。これにより、原則的に、教員免許状の有効期間満了日（修了確認期限）の2年2ヶ月から2ヶ月前までの2年間に、大学などが開設する30時間以上の教員免許状更新講習を受講・修了した後、免許管理者（都道府県教育委員会）に申請することが、初等中等教育の現場の教員に求められることとなった。その目的は「その時々で教員として必要な資質能力が保持されるよう、定期的に最新の知識技能を身に付けることで、教員が自信と誇りを持って教壇に立ち、社会の尊敬と信頼を得ることを目指す。」とある。（「教員免許更新制の概要」文部科学省）
- 6) これらは、授業あるいは講習を終えた感想として述べられているものである。試料（コメント）の数が多いため、紙面の都合上なるべく無作為に抽出しそのまま列記したものである（教員に対する謝辞など、本研究に直接関係の無い部分は省いた。）。ただし、これらは、実践(3)を除いて、同僚と協働で行なった授業へのコメントなので、同僚の講義内容に対するコメントを内包しているものがあると思われる。

参考文献

- (1) Simon Peter BAHAU (2015) “Examining Japanese University Students’ Aspirations for Study Abroad: An Exploratory Inquiry into Preferred Destinations and the Anglophone Centripetal Pull in a Globalizing World”, Journal of Center for International Education and Research, University of Toyama, vol.2, pp.1-9.
- (2) 大石寧子 (2014) 「グローバル人材育成における日本語教育の役割：大学における現状を踏まえた一考察」『徳島大学国際センター紀要・年報』徳島大学国際センター, pp.19-23.
- (3) 境 希里子 (2012) 「日本人学生のための日本語教育 一新都心キャンパスの総合教養科目およびコラボレーション科目の場合」『文化学園大学紀要 人文・社会科学研究』20 (2012-01), pp.107-119.
- (4) 副島健治, 岩瀬裕嗣 (2015) 「異文化交流活動の一つの実践的意味— 富山県立ふるさと支援学校の児童生徒と富山大学の外国人留学生との出会いから —」『富山大学国際交流センター紀要』第2号, 富山大学国際交流センター, pp.21-26.
- (5) 副島健治, バハウ・サイモン・ピーター (2016) 「留学生指導及び受入れ・派遣支援報告 (2015年4月～2016年3月)」『富山大学国際交流センター紀要』第3号, pp.35-43.
- (6) 副島健治 (1999) 「日本語教育実践における授業の振り返り」『ポリグロシア』第2巻, 立命館大学言語センター, pp.95-107.
- (7) ——— (2002) 「日本語教育における授業観に関しての一考察」『比較文化研究』No.59, 日本比較文化学会, pp.45-57.
- (8) ——— (2004) 「日本語学習の発達過程としての「メディア日本語」の試み」『ポリグロシア』第9巻, 立命館アジア太平洋大学言語教育センター, pp.169-180.
- (9) ——— (2005) 「学習者の「主体性」と「考える」ことを基本にした日本語教育の試み」『教師(ひと)づくり教材(もの)づくり日本語教育—河原崎幹夫先生古希記念論文集—』河原崎幹夫先生古希記念論文集実行委員会, 凡人社, pp.168-181.
- (10) 高松正毅 (2006) 「日本人大学生への日本語教育—日本語変革への構想—」『高崎経済大学論集』第48巻第3号, pp.2-3-222 (下記 URL に公開).
<http://www1.tcue.ac.jp/home1/takamatsu/Theses/takamatsu2006a.pdf>
- (11) 高松侑矢 (2015). 「ダイバーシティ・マネジメントとグローバル・マインド形成の研究」『西南学院大学大学院研究論集』巻1, 西南学院大学大学院, pp.1-14 (下記 URL に公開).
<http://www1.tcue.ac.jp/home1/takamatsu/Theses/takamatsu2006a.pdf>
- (12) 戸田貴子 (2015) 「グローバル人材育成における日本語教育の役割—世界をつなぐネットワークの活用—」,

2015年ホーチミン市日本語教育国際シンポジウム「東南アジアの日本語教育の役割ーグローバル人材育成とつながるネットワークー」ホーチミン市師範大学9月19日シンポジウム講演会、講演要旨(下記URLに公開)。
<https://www.waseda.jp/fire/gsjal/assets/uploads/2016/04/pres15b.pdf>

- (13) 三宅和子・堀口純子・三原祥子・筒井洋一(2004)「大学での「日本語」教育の意味と可能性ー日本語教育、国語教育、人間関係教育、アカデミック・スキルズ教育を結ぶ視点ー」2004年日本語教育学会秋季パネル、2004(平成16)『年度秋季大会予稿集』pp.239-250。(下記URLに公開)。
http://www2.toyo.ac.jp/~miyake/pdf/nihongokyouikugakkai_syuukipaneru04.pdf
- (14) 森本哲郎(1988)『日本語 表と裏』新潮社、1988。
- (15) 山本富美子、糸川優、渋谷倫子、副島健治、戸坂弥寿美、星野智子(2008)「企業が期待する外国人「人材」の能力とビジネス日本語」『専門日本語教育研究』第10号、専門日本語教育学会、pp.47-52。

資料

- (1) グローバル人材育成推進会議(2011)『グローバル人材育成推進会議 中間まとめ』2011年(平成23年)6月22日、文部科学省ホームページ：
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/koushin/001/1316077.htm (2017年9月30日閲覧)
- (2) 教員免許更新制 教員免許更新制の概要、文部科学省ホームページ：
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/koushin/001/1316077.htm (2017年9月30日閲覧)
- (3) 「富山大学国際交流センター規則」(平成25年9月24日制定、平成26年6月24日改正)
- (4) 富山大学教養教育「留学のための教養講座」シラバス
- (5) 富山大学人間発達科学部専門科目「国際交流活動論」シラバス
- (6) 富山大学教員免許状更新講習【選択必修】「教養としての日本語教育」シラバス
- (7) 全国日本語教師養成協議会編・著『全養協日本語教師検定準拠問題集 日本語教師の実践力』2006。

巻末資料

- (1) 日本人(学生)・受講者の所見 コロキアム「留学のための教養講座」の受講生より

日本人だからこそ気づかない部分が多くあって、日本語を海外の人に説明する難しさを知った。

今の世界は日本からの視点だけでは捉えきれなくなっている。自国のアイデンティティーを保ちつつ外国のものも取り入れるのは大変難しいと思う。…〈中略〉…私たちはいずれ新しい21世紀の日本を作らなければならない。そのためには私たちが学ぶことが大事である。次の日本を作り上げることが私たちの役割だと感じる。がんばって留学しよう!

日本語の特徴について考えたことは、ほとんどなかったのに、特徴を見つけるのには苦労した。みんなから言われて、なるほどと思うことも多く、おもしろかった。…〈中略〉…私は英語やフランス語を学んで、身に付けるのにとっても苦労しているが、それは日本語学習者にとっても同じことなのに、あまり年の変わらない留学生が流暢に日本語を話しているのをみて、自分ももっと頑張らなければと思った。…〈中略〉…一度しかない人生を充実したものにするために、私は留学する人生を選びたい。

当たり前に使っている日本語について考える機会を与えてもらった。新たな発見があり面白く感じた。母国語を大切にしていきたい。…〈中略〉…留学にはぜひチャレンジしたい。JICAの活動にも興味がある。自分や日本について深く考えさせられる授業だった。…〈中略〉…教養がついた。面白かった。長期留学に行きたいという気持ちが高まった。

今まで漠然と外国へ行きたいとか、国際協力に興味があると思っていたが、…。日本語の難しさや日本についてたくさん考えることが出来た。…〈中略〉…春に語学研修に参加しようかどうか迷っているので、参考になった。

日本語はどんな言語かということを考えてとき、母語であるのに特徴などがすぐに思い浮かばず、自分は日本語について客観的によく分かっていなかったと気づいた。この授業では、普段全然考えないこと、当たり前のように感じていることについて、じっくり考えてみるのが多かったので、日本について客観的に理解できるようになったと思う。

留学の準備には、行き先の国の言語よりも、まずは自国の文化・言葉を理解することが大切だということ学んだ。特に、日本語は母語として理解しているつもりだったが、今まで思いもなかった観点から日本語の分析をして改めて日本語について理解を深めることが出来た。これから、目標の留学が出来るように、いろいろな知識を蓄えていきたい。

私は最初、この授業では外国のことについてゆったりするのかと思っていたけど、実際には私たちが住んでいる日本についてのことでした。普段、全く考えずに使っている日本語について深く考える機会を与えてもらい、本当に良い機会だなと思ったし、本当に私のためにとって大切な知識を得られて良かったです。この授業で学んだことをバネにして、外国に飛び立っていきたいです。

日本語を母語とする私たちにとってごく当然のことであるがゆえに、普段なかなか気付くことができないような日本語の難しいところや不思議なところを、また、日本語を通して日本に独特の慣習や文化などを発見する貴重な機会となりました。そして日本語を母語としない人たちと交流するにあたって、日本語だけでなく日本の文化や伝統などを深く知る必要があること、そして私達は自らの文化に関して意外にも知らない事が多いということに気付かされました。この様な私たちにとって「当たり前」であった物事を見直すという視点を得ることができるこの授業は、私をはじめ、留学を志す方々には欠かせないものだと思います。…〈中略〉…この講義を通して学んだ、私達にとっての「当たり前」を見直して相手にいわば「ローコンテクストな表現」でものごとを伝えるということは、国外の方だけでなく、同じ日本に住む人との交流に於いても活かすことが出来るのではないかと考えています。

今回、副島先生の授業を通して、日本語について様々な視点で考えることで、多くのことを学び、日本人として日本の文化を改めて見つめ直す良い機会になりました。私たちが日頃何気なく使っている日本語を今度は日本以外の国の留学生の視点で考えたり、あるいは私たちが留学した際に現地の人に日本の文化や日本語についての質問されたとき、どう説明するかを考えた時は、相手に文化を伝えることがいかに難しいかを実感しました。そして、自分が日本人として日本のことについてまだまだ知らないことが沢山あることを知り、自分の国の事なのに質問されたことに対して答えられなかったことが凄く悔しかったのです。なので、日本語や日本文化に日頃からもっと興味を持ち、海外の人に日本の良さや日本ならではの言葉や文化を伝えられる人になりたいです。今の時代は、国際交流をすることが当たり前になってきています。そんな中で、やはり自分の国のことを相手に伝えられないとなると、相手と仲良くなれる貴重な機会を逃してしまいます。英語を話せることももちろんなのですが、それ以前に自分の国への理解度を上げていく事も同じくらい大切だということを改めて感じさせられました。このように副島先生の授業は私にとってすごく貴重な時間になりました。留学を考えている日本人学生にとってすごく良い刺激になると思いますし、また自国への理解度がどのくらい自分にはあるのかを知れる貴重な機会になると思います。ぜひ来年度も開講してほしいと思います。

(2) 日本人（学生）・受講者の所見 「国際交流活動論」の受講生より

正直、この授業を履修した理由は教員免許に必要な単位を楽に取ることができると思ったからです。でも、実際に副島先生とバハウ先生の授業を受けて見ると驚きの連続で、これからの人生で支えになるような言葉をたくさんいただきました。授業の中では、自分が普段から何気なく使っている日本語や、無意識の中で正しいと思いながらレポートに書いていた日本語もよく考えてみると、様々な意味を含んでいると学び、視野が広がった。日本語を改めて考えることは、私にとっては経験と関連づけて「楽しい」と感じることができた。しかし、私がこれまで出会ってきた小学校の外国人の子どもたちや、大学内で見える留学生にとっては生きるために必要とはいえ、新しく言語を習得することは大変なことだと感じた。

これまで日本語について真剣に向き合ってきたことはなく、とても新鮮な気持ちで臨むことができた。問題として出されたら、確かに違和感があった。その違和感を「自分の言葉で表現する。」ことを学んだ。改めて日本語について考えると「難しい」一言だった。20年近く日本語を使ってきた自分ですら難しく感じる日本語を、子どもたちに教えられるか不安に感じた。

子どもたちが着実に日本語の理解を深めて行けるために、教師として、言語の壁にぶつかった子どもに対して何ができるのか。教師による支えだけでなく、クラスメイトとの関係づくりや教室の雰囲気作りについても考えさせられた。その子の苦しみは全てわかってあげることはできないと思うが、クラスとの関わりの中で安心できる居場所を作っていきたいと思った。

教員を志望している自分にとってはとても身近で、学級運営で役に立つと思った。実際にたくさんの外国人児童が普通学級で学んでいる姿を見てきた。また、言語の壁に当たり、支援級や保健室に通っている子も見てきた。そのような現状の中で、その子たちに私ができることは小さなことかもしれないが、言語という学びや出身国・ルーツを知ることを通して、自分に自信や誇りを持って生きていける子を育てたいと思った。そのために、「安心して間違えることができる居場所」作りに努めたい。

はじめは、日本語というものについて考えるのはおもしろそうだなといった軽い気持ちで受講してみようと思い、履修しました。10回の講義では、私たちの母語である日本語というものの難しさとおもしろさの両方を感じることができました。教員になる上で、生きてくるような内容だったと思います。なかなか全てを頭に入れて教員をすることは難しいかもしれませんが、もし学校にいる外国人児童がいて、その子が日本語に悩んでいたら、この講義のことを思い出してみようと思います。

日本語というものは、私たちにあって当たり前のもので、それについて深く考えるということはあまりしてきませんでした。それが、今回の講義で日本語というものを外から見つめ直すことができました。ふと感じていた日本語の不思議が解消したり、それと同時に日本語というものの難しさを改めて実感したりしました。

まず、私たちが教員になった時に、教室の中に、もしくは学校の中に外国人の児童が数名いるということが当たり前だということに気づかされました。そういった外国人の児童には日本語を学習する上で、得意、不得意があるということも知ることができました。知っていなければ、教師自身も子どもの困難に寄り添ってあげることができないだろうと感じました。

まず、私たちが教員になった時に、教室の中に、もしくは学校の中に外国人の児童が数名いるということが当たり前だということに気づかされました。そういった外国人の児童には日本語を学習する上で、得意、不得意があるということも知ることができました。知っていなければ、教師自身も子どもの困難に寄り添ってあげることができないだろうと感じました。

日本で学ぶ他国の子どもたちが、無理なく学べるような援助を行う時や、その時に他国についても知ったうえで寄り添うということ。もう少し他国の文化に触れる機会があれば良いと感じる。

この授業で日本語を外国の人に教える難しさや注意点などを楽しみながら学ぶことができました。私はこの授業を受けることができて日本語を教えるということに少し興味を持つことができたし、外国の子供がクラスにいてもある程度対応することができそうだと感じました。

私が外国語を勉強するとき様々な文法を学んで来ました。外国人が日本語を勉強するときも同じように日本語の中の文法を学んでいると思います。そういった人たちに教える人もまた文法などを理解しておく必要があり、誰でもできるような仕事ではないと感じました。自分のクラスに日本語のあまり得意ではない外国人の子供が来たときにその子供の手助けをしたり、少し発音がおかしかった時に外国語と日本語の発音の差異などを説明することで助けることができると感じました。他には国語の時間や外国語の活動で文法を教える時に授業での経験を生かすことができると感じました。

国際交流活動論と聞くと、外国について学ぶのかと思っていたが、日本語について学ぶことにまず驚いた。確かに国際交流を行う上で、自国のことについて知らなければ他国との交流もままならないのではないかなと思う。今回の講義で詳しく日本語について学ぶことができて大変良かったと思う。

英語に変換することで文法上の違いに気付くこともあり、他の言語と比較することでその言語についての理解が深まることもあるのだと実感した。

自分の国についてももっと知っておかなければいけないと感じました。日本について聞かれた時にたくさんのことを自信を持って伝えられるといいと思いました。

今までは、日本人はほかの国よりも英語の勉強をしなくて、英語を話そうとしないから他の国よりも英語で会話する能力がないのだと思っていたけど、言語の特徴的に英語と日本語は全く違うなと授業を通して思ったので、やはり英語を話さなければ生きていけないような環境にいないと私たちはなかなか英語での会話能力は向上しないなと思った。

日本語という言語を客観的に見つめ直すことができたと感じる。今まで感覚的に使ってきたが、改めて文法を学ぶと英語以上に複雑で曖昧な印象を受けた。すべてをマスターしたわけではないが、日本語の教え方を学ぶのは新しいことを学んでいるようで面白かった。また、自国のことについて知らなすぎるということを実感するきっかけになった。

「国際交流」というと英語で外国人と話すというような浅はかな意味で今まで認識していたが、それはただの言語の練習でしかないと感じた。真の意味で国際交流するのなら、まず自国について知り、聞かれたらそれを説明できるくらいにしておかなければならないと感じた。

日本語が母国語である私でも日本語について知らないことがたくさんあって驚きました。「わっしょい」とか「てんやわんや」とか、普段は何気なく使っていても実際に他人に説明するのが難しいことだと分かりました。日本語について勉強しなければ外国の人に日本語をちゃんと教えることはできないなと思いました。

今、中華料理屋さんでバイトをしていて中国の方々がたくさん働いています。その人たちは今も日本語を勉強しています。私がこの前に「明日」といっても通じなくてどうして聞き取れないんだろうと思っていました。外国の人々はそれぞれ聞き取れる音が違うということを知って話す時は気を付けて話そうと思いました。

日本語を母語としない国籍の人々がどのように日本語を学び、その過程でどのようなつまづきや発見があるのかといったことを客観的に捉えることができるとよい機会になった。

私は、春休みにアメリカに語学研修に行ったのだが、その大学の学生のなかでも日本語学科に通ったり、日本の文化に親しみをもって関わっている学生がいた。日本語は決して閉ざされた言語ではなくなったということを実感し、少しでもそのような学生の手助けになりたいと今回の学習を通して思った。

自身の経験としても、サークル活動や短期留学等で留学生の方とは触れ合うことがなにかと多かったのも、とても身になる授業を受けさせていただきました。また今度国際交流センターに行きます。

日本語についてはあまり学ぶ機会がなかったのですが、母国語について真剣に考える機会を持つことができよかったですと思います。この経験を、今後英語を学ぶ際に役立てたいです。

(3) 日本人（教員）・受講者の所見 免許状更新講習「教養としての日本語教育」の受講生より

日本語を学ぶ立場に立って考えるというのは自分にとってとても新鮮な感覚でとても勉強になりました。

日本語教育と国語教育が違うものだということがよく分かりました。退職後、私はボランティアで外国人の子どもに日本語を教えたいと思っています。

日本語=国語だと思いましたが、全く違うものだということが改めて感じました。普段当たり前に使っている品詞、動詞や助詞などを学び直してみると、とても難しいなと思いました。…〈中略〉…外国の方たちが日本語を学ぶのが大変だろうと思いました。外国人の保護者との対応の場面で、保護者の気持ちに添って丁寧に対応したいと思いました。

外国人が日本語を理解したいのは、ひらがな、漢字、カタカナがあるからだと思っていたが、動詞、助詞などいろいろ難関な点があることが分かった。

普段特に意識して話すことがない“日本語”、意識して勉強すると難しいものだと実感させられました。そして保育者としてもきれいな言葉を子どもたちの耳に入れていきたいと思います。

自分は当然のように習得した日本語について、詳しく誰かに説明したり、なぜこうなるのか、というのを考えたりしたことはなかったと思います。今日、日本人の私も発見の連続で、とても興味深く聞くことが出来ました。もし私が外国人だったら、確かに「ここがどうしてこうなるのだろう」と疑問に思うところが納得できた気がします。

日本人向けにこのような講義がされることはあるのだろうか。ちゃんと日本語を理解するというのは、愛国心みたいなものも高まっているのではないかなと思う。

17年前に4カ月に渡って日本語教育の研修を受けたことがあるが、まだまだ未知の項目がたくさんあると感じた。外国語教育に携わる者としてまだまだ勉強していかなければならないと思う。…〈後略〉…

日本人でありながら、乏しい日本語に関する知識を実感できて、とてもためになった。

国語教師の発想では本当に分からないものもあり勉強になった。タレントさんでも留学生の方でも、日本に住む外国人の方はうまく日本語を使っていられる。本当に尊敬してしまう。自分は英語でさえ満足に話せないのに、普通の日常の日本語は話せるし、半分プロなのでせめて日本語の使い方の説明が分かりやすく出来るように、さらに勉強していきたい。

国語とは違った日本語としての文法の面白さが感じられました。…〈中略〉…文法的なことよかったです。日本語非母語話者の立場から感じる日本語の難しさや意識の違いをもっと知りたいと思いました。

いつも何気なく使っている日本語について考える良い機会になりました。今日のような見方をしていくと、日本語、語学って面白いなと興味が湧きました。

外国人が日本語を学ぶ視点で全く未知の世界でしたが、辞書形やマス形、テ形などとても興味深いものだと感じました。私は毎日園児との関わり特にブラジルの子が多いので、その子たちにどうやって接していけばよいか等、具体的な事も聞けたらよかったですと思いました。

日本語を改めて学ぶ事がとても新鮮でもう少し学んでみたい気持ちが出てきました。日本語の奥の深さを感じました。明日から子ども達に少しでも素敵な日本語が伝えられたらと思います。

私自身、日本語を大切に話したいなと思いました。また、今の学校にはいませんが、外国籍の日本語が話せない子と接する際にも話し方に気を配っていきたくたいです。